



校歌

作詞 寺田 彰司

一 千秋の雪積もりたる
富士の高嶺の雄姿ぞ
幾万代の後までも
変わらぬ誠の鑑なる

二 奔流百里石をかみ
巖に激しいや増しに
勢加わる利根の水
これ剛健のためしなり

三 あ、此の山と此の川と
日夕眺むる健男児
自然の示す巨人をば
如何に学ばん習わなん

四 白幡台の雪月花
四季の折々常総の
平野にしるく輝くは
高潔無垢の別天地

五 石段登る六十余
一足ごとに踏みかため
心を鍛え身を練りて
忠良有為の基たてん



目次

会長挨拶	2
校長挨拶	2
平成28年度総会報告	3
平成29年度総会案内	4
同窓会便り	4
母校の想い出	7
母校と私の人生	12
多士済々	15
トピック	15
進路状況	17
先輩の語る仕事を聴く会	18
オーストラリア夏期海外研修	18
ハワイ島海外研修報告	19
教室から	19
部活動状況	19
部活動奨励金贈呈式	19
第三回旧職員会	20
てーじ庵	20
進路ガイダンス	20
生活体験発表大会	20
編集後記	20

竜ヶ崎第一高等学校内
白幡同窓会事務局

〒301-0844 龍ヶ崎市平畑 248
TEL 0297-62-2146 FAX 0297-62-9830
ホームページ <http://www.shirahata.sakura.ne.jp>
メールアドレス shirahatadousoukai@gmail.com
印刷所: 倉沢印刷(株) 題字: 秋山海堂(中21)
表紙写真: 野球全校応援 ひたちなか市民球場(H28.7.12)

ご挨拶



白幡同窓会会長
染谷 信洋

白幡同窓会会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

日頃本会並びに母校の充実発展のために深いご理解と温かいご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

本年は四月二日(土)の同窓会総会開催となりましたが、今回も総会に先立ち、在校生の吹奏楽部による演奏と応援団及びチャリダーからのエールで総会を盛り上げていただきました。

総会においては、招待学年の高十九回生、高三十四回生、高四十九回生、高五十九回生並びに定時制十五回生、三十回生、四十五回生、五十五回生の出席者の皆さんに陶芸家植竹敏氏(高二十七回)作製の湯呑みを記念品としてお贈りしました。総会の審議・承認事項等については「総会報告」欄をご覧ください。

今年度は活動の柱の一つとして、ホームページを立ち上げることにしました。同窓会の活動状況

がよく見えるように、櫻井篤美校外幹事が中心となって鋭意進めています。

会報も年内には皆様のお手元にお届けすることができるようになりましたが、内容も年々充実してきています。ご協力に感謝いたします。

六月の白龍祭には、今年も同窓生有志が参加して餅つき大会を行いました。お揃いのポロシャツを逃えたのでたいへん人目を惹きました。売上金は熊本大地震で被災された方々のために役立てていただくよう学校側に委託しました。

今年野球部が夏の県大会準々決勝まで進む活躍をしてくれましたが、球場でも例のポロシャツを着た一団が熱い応援を繰り広げていました。

八月末には神奈川に出かけ、湘南高校と小田原高校の同窓会活動の様子を伺ってきました。だいぶ充実した活動をしており、たいへん参考になりました。対応してくださった両校の役員や事務局の皆さんには心から感謝いたします。

九月に入って、毎日新聞が首都圏版の「母校をたずねる」シリーズで、竜ヶ崎一高の卒業生や一高にまつわる話題を取り上げてくれました。各県一校という中で、本県からはわれらが母校が選ばれたことをとても嬉しく思いました。後輩の皆さんの活動に関して

は、折にふれ校長先生はじめ職員の方からご案内をいただいております。先生方の熱心なご指導に、心から敬意を表する次第です。本会では、関東大会以上の大会に出場する生徒に対して「奨励金」を贈呈していますが、ライフル射撃で浅井優太君が全国大会で優勝してくれたのをはじめ、皆さんが期待に応えて活躍してくれ、たいへん嬉しく思っています。

ご挨拶



校長
鯉川 光義

文武両道の実現を目指して染谷信洋会長をはじめとしたしまして、白幡同窓会の皆様には、日頃より物心両面にわたりまして、本校の教育活動に格別のご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

私は、今春の定期人事異動により、小沼光一前校長の後任として本校に着任いたしました。本校には平成二十一年度から二年間定時制教頭として勤務しておりましたので、七年ぶりの勤務になります。その当時に在職しておられた職員の方も多く

竜ヶ崎一高は今年創立百十六年目ですが、百二十周年に向けて学校側と連携をし、皆さんのご支援ご協力をいただきながら方向性を考えてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

結びに、会員の皆様のますますのご多幸ご活躍と母校のさらなる充実発展をご祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

残っております。大変心強く思っております。また、勤務二年目の三月は歴史的な大震災に見舞われた年でもありました。そしてその四月には、混乱のさなか後ろ髪を引かれるような気持ちで新任地に異動したのもちょうどこの年でした。しかし、再び本校に戻ってみると、すっかり震災の傷跡もきれいに元通りになり、とても嬉しく思いました。日本社会は、古来より豊かな自然の恩恵を受ける一方で、抗いがたい自然災害に繰り返し見舞われる運命にあることを、昨今私達は改めて思い知らされました。自然と人間との関係、当たり前と思っていた生活への反省、人の命について等、こうした経験をいかに自分のものとして、これからの生き方につなげていくか、それが今後問われている大きな課題の一つであると思

ます。また、「失われた二十年」と呼ばれる経済の長期低迷、少子高齢化による人口減少など、日本は過去に経験したことがない多くの重大な困難に直面しており、新しい時代に向けた課題解決が今後益々必要となつてきています。

昨年の六月に、公職選挙法等の一部を改正する法律が成立し、公布され、本年六月十九日施行となりました。選挙権年齢が満十八歳以上に引き下げられたことを踏まえて、高校生の間から有権者となりうる高校生世代が、これまでの歴史、つまり今まで受け継がれてきた蓄積や先人の取り組みや知恵といったものを踏まえ、自分が暮らしている地域の在り方や日本・世界の未来について調べ、考え、話し合うことによって、国家・社会の形成者として現在から未来を担っていくという公共の精神を育み、行動につなげていって頂きたいと思ひます。幾多の困難、災害を通して感じたこと、学んだこと、得たものを忘れず、これからの行動に生かすことで、より良い社会をつくる一員となつてくれることを在校生には期待しています。

本校は、平成二十二年度に「いばらき版サイエンスハイスクール(ISH)」として、「医学・

難関理工系進学コース」の指定を受けるなど、理数教育の充実を図ってまいりました。さらに、平成二十六年度からは、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」に指定され、科学立国日本を担う優秀な科学者の育成と世界に通用する人材の育成を目指し、大きく躍進しようとしています。このプロジェクトで実践する協働的探究活動をとおして、「主体的に学び続ける力」「チャレンジ精神」「リーダーシップ」「問題解決能力」「コミュニケーション能力」「発信力」などの資質や能力を育むことをSSH五年間の目標としています。

開校一六六周年に入り、「文武両道」の旗印の下、各部が活気を呈し、着実に進学および部活動での実績を挙げています。この文武両道について、私は職員生徒に「文と武に努めるだけでなく、さらに秀でることである。言うは易く、行ふは難し」と常にお話しをさせていただいてるところであります。本校の生徒であるならば必ずや、その本意に一人一人が合致できると信じております。

次のステージである二〇二〇年の節目に向け、SSHの指定をきっかけに、地域の進学校というだけでなく、茨城を代表する

学校へ駆け上がったいきたいと思えます。さらに、これからの日本を担う数多くの優秀な人材が輩出できるよう微力ながら、職員一丸となり在校生の指導に邁進していきたいと思えます。同窓会の皆様の更なるご支援とご協力をお願いいたします。ご挨拶とさせていただきます。

総会報告

平成二十八年度の白幡同窓会総会が四月二日に竜一高体育館で開催されました。開会の言葉に続いて、応援団とチアリーダーによる校歌と応援歌の斉唱。そして恒例となった吹奏楽部による演奏披露がありました。出席者はアイガーデン下平での懇親会を含めて百十余名でした。今年度の招待学年は高校十九回、三十四回、四十九回、五十九回と定時制十五回、三十回、四十五回、五十五回でした。審議・報告事項は次の通りです。

- 一 平成二十七年事業報告・決算報告
- 二 平成二十七年会計監査報告
- 三 平成二十八年度事業案・予算案
- 四 学校概況報告（進路・部活動）

平成 27 年度白幡同窓会収支決算書

収入総額 16,192,312 円 支出総額 10,823,028 円 差引残高 5,369,284 円（平成 28 年度へ繰越）

科 目	本年度 予算額	本年度 決算額	比 較		摘 要
			増	減	
1 繰越金	10,742,273	10,742,273			平成 26 年度より繰越 内訳 定期① 5,962,998 円 常陽銀行 (H28.3.9 解約) 定期③ 1,254,142 円 水戸信用金庫 会計用 3,525,133 円 常陽銀行 普通預金
2 入会金	1,788,000	1,722,000		66,000	全日制 6,000 円× 273 名= 1,638,000 円 定時制 6,000 円× (12+2) 名= 84,000 円
3 協力金	3,200,000	2,983,000		217,000	ゆうちょ銀行扱い分 (27.3.7 ~ 28.3.6) 676 件 1,387,000 円 コンビニエンスストア入金分 (27.3.7 ~ 28.3.6) 798 件 1,596,000 円
4 雑収入	1,727	745,039	743,312		11 回卒業高橋さん (10,000 円) から寄付金 定期預金利息 定期 ① 1189 円, 定期③ 251 円, 定期①解約利息 18 円 普通預金利息 381 円, 名簿売上 22,500 円 同窓会名簿販売協力金 710,700 円
	15,732,000	16,192,312		460,312	

【本部役員】
会長 染谷 信洋 (高15)
副会長 小倉 培夫 (高20)
副会長 大和佐知雄 (高28)
監事 関口 広行 (高26)
監事 山田 實 (高26)
顧問 野口武太郎 (中40)
顧問 齋藤 佳郎 (高8)
顧問 横須賀英明 (高10)

【校外幹事】
幹事長 宮本 正俊 (高10)
副幹事長 小嶋 豊 (高10)
副幹事長 木野内昭治 (高13)
幹事 服部 俊夫 (高25)
倉持 正男 (高27)
篠塚 文男 (高28)
横田 久 (高28)
櫻井 篤美 (高29)

※校内幹事は十五名です。

大野 雅之 (高30)
大野 雅彦 (高31)
福田 道義 (高31)
本田 仁子 (高31)
山崎 睦 (高31)
海田磨起代 (高36)

科 目	本年度 予算額	本年度 決算額	比 較		摘 要
			増	減	
1 事務費	530,000	445,756		84,244	
1 消耗品費	10,000	4,040		5,960	定期残高証明書、高校野球記念誌代
2 支払手数料	200,000	171,704		28,296	ゆうちょ銀行扱い分 (27.3.7 ~ 28.3.6) 手数料 79,040 円 コンビニエンスストア入金分 (27.3.7 ~ 28.3.6) 手数料 92,664 円
3 印刷通信費	300,000	270,012		29,988	総会案内用往復葉書・宛名ラベル代
4 旅費	20,000	0		20,000	
2 事業費	4,490,000	3,747,237		742,763	
1 総会費	200,000	93,237		106,763	総会経費補助
2 会報発行費	2,500,000	2,367,206		132,794	会報 27 号印刷代 (504,468 円) 会報郵送代 (1,862,738 円)
3 会議費	150,000	148,242		1,758	幹事会経費
4 招待学年記念品費	0	0			25 年度に招待学年記念品代 (白萩湯呑) 300 個作成
5 卒業記念品費	200,000	157,505		42,495	卒業記念品代 (卒業生へ証書用筒)
6 部活動奨励金等	1,000,000	560,000		440,000	※ 20,000 円 + 5,000 円 × 出場者人数 (10 万円限度) 関東 (陸上部、射撃部、ソフトテニス) 全国 (射撃部、ソフトテニス)
7 学校行事補助	300,000	281,047		18,953	SSH 関連事業経費、出前授業生徒交通費、高大進捗経費
8 国際交流基金	140,000	140,000			国際交流補助 (平成 26 年度 ~ 28 年度)
3 慶弔費	350,000	183,000		167,000	弔別金 (27 年度定期異動 12 名)
4 基金積立金	6,000,000	6,000,000			基金積立金
5 予備費	4,362,000	447,035		3,914,965	白幡会館管理室エアコン改修、白龍祭参加経費
計	15,732,000	10,823,028		△ 4,908,972	

平成 29 年度 総会の案内

平成 29 年度の**総会**は**4月8日(土) 12:30**に竜一高体育館にて開催予定です。今回ご案内の往復葉書を差し上げるのは、各卒業回の幹事の方々と、**招待学年の高 20 回(昭 43 年)・35 回(昭 58 年)・50 回(平 10 年)・60 回(平 20 年)及び定時制 16 回・31 回・46 回・56 回の卒業生全員**です。

お誘い合わせの上、多数の同窓生の参加をお待ちしています。

なお、招待学年の出席者の方には、陶芸家・植竹敏氏(高 27 回)作製のオリジナル、校章入りの「白萩釉鍋湯吞」を記念品として贈呈いたします。

招待学年以外の同窓生の参加も歓迎いたします。参加いただける方は事務局までご連絡ください。

総会終了後には、例年通り**懇親会**を竜一高下の「**アイガーデン下平**」で開催する予定です。

同窓会便り

高校第七回

傘寿の同窓会

大久保泰夫

二年毎に開催している同窓会も今年は傘寿の同窓会となり七月十日喜仙で開催しました。この歳になると出席者は減るのではないかと思っていました。予想以上の五十七名が参加してみんなニコニコ和気あいあい、大盛会となりました。

幹事長挨拶は傘寿らしく踊り用の蛇の目傘をさして挨拶しました。竜一高から先生と生徒が旧講堂に関するアンケートの依頼に来て生徒さんから主旨説明がありました。この研究論文は青少年の地域研究を奨励し郷土愛を育むことを目的とする第十五回櫻井徳太郎賞に応募するとの事です。

続いて乾杯の発声は一番遠くから参加の兼松友子さんにしていただき大成功。そして宴の半ば頃兼松さんが歌った曲は「誰か故郷を想わせる」。その脇に写真で参加の吉浜さんが踊っている曲が同じく「誰か故郷を想わせる」。遠方に住んでいる人は故郷を想っているのでしょうか。その上に掲げてあるのは校歌のパ

ネルですが兼松さん旧姓寺田は作詞者寺田彰司先生のお孫さんです。

この校歌のもと相集う絆は喜び幸せを感じます。お開きの校歌応援歌は竜一高創立百周年記念で頂いたCDの伴奏で声高らかに歌いました。

次回も圧倒的多数の賛同を得て開催することに決定しました。健康に留意してまた皆で声高らかに歌いましょう。

千秋の雪積もりたる...

一足先に旅立った仲間が八十五名の多きに達しました。

ご冥福をお祈り黙祷を捧げました。



高校第八回

齋藤 佳郎

昭和三十一年に卒業して今年には卒業後六十周年を迎えました。前回平成二十五年に開催した際、次回は卒業後六十周年を記念して平成二十八年開催を決定し、会報でも紹介しました。

幹事代表塚本延世氏のもと、三か年お世話になった恩師、今年卒寿を迎えられた齋藤邦彦先生(数学、剣道部、バスケット部担当)のご臨席をいただき、十月二十九日(土)「松泉閣」において開催されました。女性七名、男性三十九名が参加、記念撮影の後、木梨孝子さんの司会で、物故者に対する黙祷、幹事代表の挨拶、齋藤先生からご挨拶。

宴会に入ると、七名の女性に囲まれた先生のもとに次々と男性も集まり歓談。先生もご満悦の様子でした。久しぶりに会う同窓同士。自分がすっかり忘れていたことを友から話され、友が忘れていたことをこちらから語るなど、これぞ同窓の集まり。どなたも笑顔に満ち、実に和やかな雰囲気時間が進む。賑やかに話が弾み、中締めの前に校歌斉唱。お疲れと思い、「先生、お座りのままどうぞ」との声にも、「校歌斉唱だから立つよ」と、さすが剣道達人の先生のお姿。中締めの後、先生をお送りし、同所にての二次会にも三十名近くが参加し、名残尽きない話、カラオケが続いた。

幹事会では次回の話になり、従来三年ごとに開催してきた会を一年早めて再来年開催してはどうか。また、東京近辺在住の方

も多く参加できるよう会場を東京にしてはという提案。高校第八回卒の皆さん、再来年の会を御期待ください。



高校第九回

井原 邦夫
高野 睦

なんとまあ、のんびり屋がそろったもんだ、竜一高第九回卒業の面々には！

今般、同窓会を開いたのはよいが、これが二十一年ぶりの快挙!?

からりと晴れた日曜、五月十五日、シビレをきらした高齢者がおよそ六十人、やって来ましたが、アイガーデン下平へ。受付を済ます前に、ご無沙汰している母校の今の姿を見に行く。永きにわたって事務長を務めた

楠本忠一幹事の説明によると、われらが在学中になれ親しんだ建造物で今に残るのは、当時の図書館前の人工池へ日本海へのみとか。

会場へ戻って、まず記念撮影

なのだが、前列中央、先生方の椅子が空いている。誰が座っても違和感ないヨとヨタが飛んだが、国吉勝彦代表幹事が開会挨拶の中で、「ご高齢を気遣ってどなたもお招きしていいないが、ご恩は忘れません」と。恩師のみならず、級友の中にも共に喜寿を祝うことの叶わなかった者も少なくない。その無念を汲んで黙祷を捧げ、つづいて校歌斉唱。たちまち時間が逆戻りして、先導役の串田武久君もしばし無言。それへ被せて「乾杯！」と発声したのが中島俊彦幹事、一同気を取り直して拍手、着席。

祝宴の盛り上がりは言うまでもなく、十台のテーブルを各自行き来しては、往時の思い出にふけり、歩んできた道の遙けさを振り返った次第。やがて、「二年後にまた会いましょう」との決議案が急遽採択され、中締めの本手締めが野口二夫幹事に託された。なお、名簿チェック、案内状発送など事務作業は、昌浦幸雄幹事および田村カツ子(旧姓吉田)幹事が一手に引き受けてくれたのである。

宴は、まだ終わらない。若干の退席者はあったが、喉自慢・腕自慢たちが第二部を賑やかにしてくれた。古館イチローも真つ青の司会役、野崎尚孝幹事に盛大なる拍手を！

尚、今回の同窓会に際し、幹事全員で、白幡同窓会名簿をひとりひとり当たって、住所を確認、訂正し、新しい名簿を作成した。

そして、全員に送付、学校事務局にもお渡しした。



高校第十五回

糸賀 興右

平成二十八年十月二十九日(土)十一時開始で、竜ヶ崎第一高等学校第十五回卒業生同窓会が母校下の「アイガーデン下平」で開催されました。参加者は五十八名でした。私は神戸の会社で働いていたことから、長い間同級生との接触がなく、五年前の前回には参加できませんでした。しかし、退職と家庭の事情により四年前に帰郷し、今回参加できたことを本当

に嬉しく思いました。

参加者の集合写真撮影の後、会話は野沢君の司会で始まり、篠崎君の開会の辞の後、発起人を代表して石嶋君の挨拶がありました。発起人会は何度も開催されたと聞いていましたが、出席者名簿や出欠回答に書かれた近況報告の編集等々、周到に準備が進められたことが窺い知れました。感謝の念で一杯であります。次に白幡同窓会長の染谷君から挨拶を頂きました。同級生から白幡同窓会長が誕生したことは大変名誉なことであり、嬉しい限りです。会長として同窓会活動をますます盛り上げて頂けると思っています。

石田君の発声で乾杯をした後は、皆思い思いの顔を捜してテーブルを動き回り、旧交を温め合いました。ともすれば話題は健康に関することが多くなる年頃で、本会でも例外ではなかったようですが、元気になる話もたくさんありました。一島君から高十五回同窓ゴルフ会の紹介がありました。参加者を壇上と呼び上げ、年二回の開催でこれまで七回実施したとの報告と、新たな参加者の勧誘が行われました。まだまだ元気な人が沢山居られ、心強い限りです。また、女性の参加者が十名ありましたが、姓が変わった人が多数であり直ぐには誰か分からない人も居るだろうとの配慮から自己

紹介をしていただきました。多くの人は在学当時の制服姿を思い出したのではないのでしょうか。当日、一番の遠隔地から参加したのは北海道旭川市からの大嶺君で、近況を話していただきました。囲碁の会をスタートさせる話が出て、私も含めて数名が手を上げました。

時間は瞬く間に過ぎ、何年振りの校歌の斉唱、一島君によるエール、潮田君の音頭での三本締めによる中締めで会は終わりました。前回は平成二十五年の開催、約七十名の参加で恩師もお招きしたとのことですが、今回は残念ながら恩師のご参加はありませんでした。

私共は敗戦のすぐ前、昭和十九年から昭和二十年生まれです。干支は六巡目の申と酉で今年から来年にかけて満七十一歳となり、古希は疾うに過ぎております。近年では古希と言う言葉は元々の意味を成さず、七十歳は何ら希ではありませぬ。昨年の刊行の卒業生名簿によれば物故者は二十七名。その後亡くなられた方



住所不明者の中で亡くなられた方を考慮しても沢山の方がお元気です。喜寿までには後五年、東京オリンピックかその翌年頃次の会が開催されればこの上もなく嬉しいと思う次第です。

高校第二十七回

細野(金子)純子

霜月十九日、朝の雨が色とりどりの落ち葉を濡らし、カラフルな絨毯を踏みしめて、還暦竜一同窓生が三々五々学び舎の近く「アイガーデン下平」に大集合。

記念写真撮影後、十四時から大宴会スタート。幹事挨拶、次期幹事決定後、一つ目の目玉の恩師紹介。

お足元の悪い中をお運びくださった、大野英二先生、石島勝先生。両恩師ともお変わりなくお元気。

大野先生は、言わずもがなの英語で自己紹介。もちろん一同大受け。

その独特の語り口は今も健在で、毎朝四時からYOUTUBEで英会話を楽しんでおられるとのこと、脱帽。英語を一生の友として楽しみ、今なお勉強するお姿は、学ぶ楽しさを身をもって教えて下さる、正に一生の教師。

石島先生は、白い御髪以外は当時のお姿のまま。元々のお若いお顔立ちには、我々の中に席を設けて語らえば、たちまち区別がつかない若々しさ。

新卒で竜一に赴任され、我が学年の受け持ちとなられ随分と手こずらせたこと、今更ながら頭の下がる次第。退職後も望まれて教壇にお立ちと聞き、その若さに納得。

ご多分にもれず、会が進むにつれ席は乱れ、湧き起こる歓声や少女の如き高らかな笑い声、少年のような戯れの叫び。何だこれは？そう、ホームルームでアルコールが入ったらきつとこうだろう、これこそ歓談。

面变わりの同級生と云いつつも、よくよく見れば面影が。同級生定番のギャグ、お前いくつになった？で爆笑、キヤーツ、しばらくネー、と肩を抱き合う目元は、竜一時代の少年少女の眼差しそのものの。

互いの近況、悲喜こもも多々あるが、この場に集える喜びと有難さを語り合い、瞬く間にタイムスリップ。

改めて、同級生とは、かくも不思議なものと感じ入る至福の時、特に今回は、後にも先にもこれっきりの記念すべ

き還暦同窓会だからなおさら。各人の近況報告の後、二つ目の目玉、武石（現・矢口）久良先生登場。紅葉に映える白いお召し物が心憎い。お元氣なご様子で何より。

その後有志で二次会、楽しいひと時は瞬く間に過ぎ、ほろ酔いで再会を約束して散会。

最後に、長い時間をかけて尽力してくれた幹事の方々に感謝。



高校第三十四回

宇都宮加城

平成二十八年四月二日に開催された白幡同窓会に私たち高校三十四回生（昭和五十七年卒）が招待され、総会に二十四名、懇親会に三十一名が出席しました。私たちも卒業して三十五年が過ぎ年齢も五十歳を超え、皆の風体も年齢相応に変わってしまいました。会場が久々に対面した旧友が誰であるかが分

かった瞬間、「○○君」「○○ちゃん」と呼び合う光景が広がりました。皆の気持ちが三十五年前に戻ってしまったのかどうかは分かりませんが、少なくとも皆の会話は在学当時と何ら変わるものがない感覚で交わされていたと思います。これも、時は流れても竜一高の同級生だという絆の醍醐味なのでしょう。

懇親会ではお互いの近況を報告し合い、昔話に花が咲き、出席者が持参した高三当時の野球応援の写真や卒業アルバムの写真を見て、眠っていた当時の記憶が呼び起こされ、皆の会話が更に弾みました。また、在学中はクラスが違い話す機会がなかった者同士も気軽に言葉を交わす和気あいあいとした雰囲気

が溢れていました。懇親会は三次会まで続き、名残尽きない宴は竜鉄の最終で終了しましたが、皆それぞれに白幡台で過ごした三年間の思い出を大切にしていることが確認し合え、より親睦を深めることができましたと思います。

また、私たちが卒業した当時は携帯電話などが無く、連絡先を維持し続けることは今ほど容易なことではなかった時代ですが、この同窓会を通じて疎遠となっていた仲間とも連絡先が再確認でき、容易に連絡できるよ

うになったことは意義深いことだと思えます。

この同窓会では、皆が時代を共有した仲間と交流することの楽しさを感じ、またいつの日か再会したいという気持ちが芽生え、今後もうような繋がりを大切にしていきたいと思う良い契機になったと思います。

最後にこのような素晴らしい機会を頂き、また同窓会幹事及び事務局の皆さまに感謝を申し上げます。同窓会のレポートに代えさせて頂きたいと思えます。



高校第四十七回

嶺 芙美子（旧姓 満木）

卒業してから二十二年の歳月が過ぎ、四〇歳になる年を迎えました。そんな折、当時の生徒会長である飯塚さんが発起人となり、一〇〇人での同窓会実現に向け奔走しているという連絡を頂きました。卒業以来母校に足を踏み入れることもなく、数人の友人

以外は久しく会っておりませんでしたので、誰かわかるかな、わかってもらえるかな、そんな思いを胸に当日を迎えました。

予想は的中し、誰だっけ？のオンパレード。さりげなく名札を見て、予習してきた卒業アルバムを思い出しながら話してみると、意外にもすぐに当時の感覚に戻り、会話が絶えないものでした。そんな最中、三年次の担任である清水先生にお会いし、目を疑いました。高校時代と全くお変わりがないのです。さらに一瞬タイムスリップした感覚になり、頭の中が若干混乱状態のまま、二十二年ぶりの挨拶もそこそこに、失礼ながら「先生今何歳ですか？当時おいくつだったんですか？」と畳みかけてしまいました。先生は私達のちょうど一回り上というところで、当時は漠然と先生「大人」親世代と想っていたので、少々衝撃を受けつつ、自分が子供だったのだなと感じると共に、先生の偉大さを再確認する思いでした。

今回の同窓会には、学年主任の椎名先生をはじめ、全クラスの担任の先生方八名がご出席され、海外や遠方からの同窓生も集まりました。参加

者は合計九十名以上となり、当時の思い出や今だから言えること等々、話題に尽きることはありませんでした。また、都合がつかず欠席となった方々からの近況報告もあり、二十二年ぶりに恩師、多くの同窓生と繋がった気持ちになりました。最後は野球部の青木さんによる万歳三唱で、盛大な会は幕を閉じました。

母校の素晴らしさ、有難さを改めて感じた貴重な機会の実現にご尽力頂きました同窓会幹事の皆さまに、心より御礼申し上げます。



高校第四十九回 第一回同窓会を終えて

田中 明人

霜降の始まる十月下旬という、学校の運動会など多くの子供行事と重なってしまう秋の時期の開催案内でしたが、今年十月二十二日、千葉県柏市SHANTYにて一九九七年卒同窓会を開催いたしました。

た。当日は四人の恩師をお迎えし、総勢五十人に及ぶ盛会となりました。当時の学年主任川北弘先生からご挨拶と乾杯のご発声をいただき、会がスタートしました。在学時の思い出などに花が咲き、出席者一人ずつにマイクを回して近況報告をしてもらいました。また、海外在住の恩師からのビデオレターも上映し、最後は校歌を全員で合唱しました。最後の締めとして一本締めで一次会に幕を下ろしました。

その後の二次会も新しいメンバーが加わり、改めて恩師と同期生との絆の強さを感じました。様々な立場で活躍する同期との交流で新鮮な刺激を受けた中身の濃い、非常に有意義な時間となりました。また、同窓会に出席できなかった同期生や恩師の近況報告を事前に収集し、一覧にまとめて出席者には配布しました。今ではFACEBOOKやLINE等のSNSを通じて簡単に連絡の取りあえる時代となりました。本卒業生のLINEグループも立ち上がりました。今後も積極的に声を掛け合って同期が集まっていこう、という意見が多数出ました。何かの縁で同じ時期に高校生活を過ごした仲間との絆を、

今回の同窓会を機に更に太く強いものにしていけたらと切に願っております。



音楽部

野上 哲夫(高21回)

二〇一六年五月二十二日、母校近く「アイガーデン下平」にて、十九〜二十一回卒メンバーでの音楽部同窓会が開催されました。懐かしい恩師南畝清志先生と古き良き仲間達との、卒業後実に半世紀ぶりの再会となりました。

今回、同窓会開催に至ったきっかけは、十九回卒の船橋音楽部初代部長が当時一年生だった部員と偶然市内で出会い、県立県民文化センターでの合唱コンクールに出場したメンバー(十九〜二十一回卒)で集まろうかと意気投合したことからでした。

私たちも皆六十五歳を超え、悠々自適に生活する者、現役で仕事に携わっている者、今も

なお音楽活動に励んでいる者など生活スタイルは様々ではあるものの、実年齢よりも皆ずつと若々しく、南畝先生も当時と変わらずお元気そのものでした。南畝先生を囲み、当時の部活の話から今日までの五十年、これから先の人生について語らい、仲間の今に大いに刺激された有意義な時間を過ごすことができました。南畝先生にも「夢のような楽しい時間をすごせた」とお言葉をいただき、全員で最後に校歌を歌うことで、楽しい時間を共有できたことに感謝しながら来年二〇一七年五月の再会を約束し、解散しました。次回開催時には二十二回卒以降の皆様もお集まりください。

また、現在音楽系の部活は吹奏楽、軽音楽等に引き継がれ、スタイルは異なるものの、今もなお脈々と音楽を愛する心は引き継がれているようです。昭和四十一年創部の吹奏楽部は、四十四年ぶりの甲子園出場をきっかけに吹奏楽経験者を募って急遽結成されたという歴史があり、創部五十年目を迎えております。当時とスタイルは変われど、生活の中に『音楽』があることで、我々は心豊かに生きていけるのではないかと改めて感じる事ができました。

最後に、今回同窓会企画にご

尽力いただきましたました十九回卒船橋部長と田坂先輩にこの場をおかりして厚く御礼申し上げます。



母校の思い出

ゆつくりと流れた学生時代



高 20 回
秋田 光祥

卒業五十年、学生時代はゆつくりと流れていました。先ず石段まで自宅から徒歩で校内を抜けて教室へと。其の後、教室へ入るやいなや職員室に掲げられた授業の変更の黒板を見に行き、六限のカットの有無で一喜一憂で始まる誠にゆるやかな調子で一日の開始。其の様な三年間の学生生活は、部活は一年でリタイア、学業は入試合格後の試験以降、早急に部活同様にリタイア。

只々授業を受けるだけであり、所謂大学入学後、すぐに始まった学生運動にたとえれば正しく

私は「ノンセクト」「ノンポリ」です。

しかし顧みて思い出すのは多々有り。

入学直後の体育館での先輩との対面式「宜しくお願いしまあーす」「礼」と校歌の「石段登る六十余」、当時一割にも満たない女子学生は、しとやかに車坂を上る。

恒例、一月十五日に行われた二十キロ徒競走、英語の先生であつた飯島教頭が曰く「明日二十キロ走があるがグリコキャラメル何個食べたら完走出るか考える」一粒三百メートル、ユニークな問題で、当日、最初の市中だけは一生懸命に走った。三年次の体育祭、待ちに待ったフォークダンス。女子学生が少ないので男子学生と肩を組む事もしばしばあつた。先生方を思い出せば渾名で「アボガドロ大先生」「ベートーベン」「館長先生」「バ」渾名は止めましょう。各先生も気軽に返事をなされた。先生も気軽に返事をなされた。なんやかんやで卒業式。音楽の授業も無く先生も居ないので大徳先生が、ポロンポロンと弾いていました。以上の如く三年間が終わった。

真船校長とは(当時、県高野連の会長。私達が卒業と同時に退官されたと記憶する)大学時代に神宮のライトスタンドでよ

く二人で芝の上で寝ながら幾度となく観戦しました。只々書き綴り、私のほっこの学生時代です。

白幡台に集まり散じて



高 20 回
池辺 勝幸

白幡台を去り、五十年の時が流れました。振り返ると昨日の事のように思い出されます。

入試合格発表の日、自分の名前を探すが、目がふわふわして見つからない。「アッタ」と貼られている合格リストを見ると、自分の名前が間違っている。池辺の辺が田になっている。耳もとで誰かが間違っていないと言ふ。自分の名前はないのか。

余裕をもつて受験したつもりが、一瞬血の気が引く。慌てて探そうち、自分の名前をヨウヤク見つけた。ホットした。これが入学の始まりだった。

私の高校生活は、ほとんどが剣道一本だったように思われる。勉強はしたとは思ふが、あんまり記憶にない。稽古の疲れか、授業中は舟をこぐばかり。家に帰って、「朝早く起こして」と母に頼み、起きるはずが本を

机に立てて、これまた舟こぎ。勉強しなくちゃー、しなくちゃーと思ひながら、未消化状態だったことが思い出される。個性的で、優秀な先生方には申し訳なかつた。でも剣道部長をされた

井坂先生の特別授業があり、土浦一高の理数系の数学平均点数をクラス平均で上回ったことが記憶にある。通学時間の節約にと、大野敏和と自転車通学で6号国道。肌が痛い冬の牛久沼に浮かぶ白い富士山、そして数羽の白鳥。霜解けの女道道で車輪に泥が詰まり、自転車をつん

と投げる衝動にかられた日。県の代表戦で大将の私が負け高校総体茨城代表になり損ねた日。いろいろの思い出が浮かんで消え、なつかしく思われます。多くの友人の交わりの中で、今年も同窓会がありました。横須賀先生もお元気で出席され、仲間と共に親交を深める事ができました。父も叔父も龍中卒。妻も

長男も一高卒。卒業後、東京で様々の経験をさせてくれた弁護士の大野先生も龍中卒。小学生の時は東武館、中学生の時は一高剣道部と小さい時から剣道を通して様々な経験を積ませてくれた谷島先生。大野敏和はガンに倒れ、池田は同窓会の開かれた日にマッキンレーの露と消え、母も父もお世話になった

方々も亡くなられた人が多くなつた。

白幡台に集まり散じた大勢の同窓会の方々、陰に陽にとつながり合う縁に助けられ、生きてきた今日。本格的に迎える少子超高齢化社会、激動の地域社会の変化が訪れるのを迎える今、肩の力を抜いて、共鳴し合える仲間と地域づくりを考え、行動する思いを新たにする機会を与えてくれた小倉君に感謝します。

竜ヶ崎一高の名声が益々高まり、生徒、先生方が充実した高校生活を送られ同窓の諸氏がますます活躍されん事を祈念します。

歴史と伝統を誇る母校



高 20 回
持丸とみ子

竜ヶ崎一高を卒業し約半世紀を過ぎようとしています。記憶も次第に薄れていく中で、今も鮮明に頭をよぎってくるのは合格発表の出来事です。当日母が発表を見に行き、「合格」の知らせを受けましたが、私は自分でも確かめたいと思ひ出かけて行きました。ところが、そこで私は交通事故に遭つてしまつた

のです。その後のクラス分けテストも受けられず、「ホーム・スクール」の区別があることも知らず、入学当初、移動の際にはただただオロオロしていたことを思い出します。

長い石段を登り、古めかしい校舎、講堂を目の当たりにし、さらに中学校校舎のものは全く違つた校歌を耳にした時、深い歴史と伝統を感じ竜一の子生になれた幸せを改めて感じておりました。友人に誘われてよくわからず竜一を志願した私でしたが、この決断がとても良かったと心から感じました。

進路については、製薬会社に勤めていた父の勧めもあり、中学時代より衛生検査技師(後の臨床検査技師)を目指していました。たまたま友達となつた一人に、お姉さんが検査技師の方がいらつしゃつていろいろな情報を得ることができました。就職してから大変お世話になりました。また病院の見学に行つた時なども竜一の先輩にお会いすることもあり心強く思つておりました。竜一で築いた友人や先輩、後輩とのつながりには深い感謝の念に堪えません。

先日、新聞に「科学の基礎に日本名」の見出しがありました。人類の長い歴史でも一一八種しか見つかつてい

ない物質の基本要素である元素の周期表「一三に「Nh(ニホニウム)」と命名されたという内容でした。五十年近く前に私は専門学校の面接で周期表について質問を受けたのでした。今でも忘れられない事の一つです。

現在、夫、弟、義姉、妹、息子、三人の姪たちが同窓生です。さらに孫が加わるのを楽しみに願う今日このごろです。

いろは坂から



高 35 回
富山 正美

娘の保護者面談で母校を訪れると、うれしい反面、高校生の未熟で恥ずかしい自分に会いそう、隠れたくなる。実は父も卒業生(昭和二十年代)で、靴が買えずに下駄で通学したところ、野球に没頭していて勉強しなかったことなどを子供の頃から聞かされている。三代に渡りお世話になる竜一は、私にとって永遠に青春の場だ。「人生のいつに戻りたい?」の話題が出ると、「高校時代」と即答してきた。なぜか?周りの人々に恵まれ、のびのびと自由に過ごさ

せてもらえたからだと思う。

「母校の思い出」の原稿依頼を受けて、何が一番の思い出だろうと考えた。先生方、友達やクラスメート、当時の風景、教室、新旧体育館、授業、部活、行事、浪川パン屋、いろは坂の映画のように、生き生きと迫って来て、たくさんの「ありがとう」や「ごめんなさい」の気持ち湧き上がり困った。

私が竜一に入学した昭和五十五年は、まだ古い講堂が残っていた。先輩方が大人で、同級生も立派に見えて、自分を実物大以上に見せようと必死だった。いろは坂を初めて自転車ですり切れた時は、誇らしかった。十二月の英語の授業中、先生からジョン・レノンが射殺されたニュースを聞き、衝撃を受けた。高二の時は、多くの同級生がそうであったように、部活動(バドミントン部)中心の生活だった。英語の発音を良くしたくて、「百万人の英語」や「ラジオ英会話」を聞いた。七月にダイアナ妃とチャールズ皇太子が結婚し、体育祭の仮装行列では三年生が成婚パレードを華やかに再現して感動した。高三の時は六月に部活を引退して、一気には受験のしかり不安で一杯だった。その反動で自由登校になると無気力になってしまっ

たのは辛かった。思い出は尽きない。

現在は毎年、部活の仲間が同期の女子を招集してくれ、フアミレスで集まっておしゃべりしている。折に触れてメールをくれる同級生もいる。それぞれの人生を歩んでいるが、それを分かち合える人々に出会えたことをありがたく思う。

最後に、紙面をお借りしてお世話になった先生方、同級生や先輩後輩に心からお礼を言いたい。また、そのご恩返しを、今そしてこれから自分が関わる所でしていきたいです。

ゆったりとした時間の中で:



高 35 回
福島 正明

私が在学した昭和五十五年からの三年間は、高度経済成長後のオイルショックを乗り越え、日本経済が安定成長期の真っただ中にいた時代であった。卒業後の数年で華やかなバブル経済が絶頂に達し、その後失われた二十年ともいわれる厳しい時代を迎えたことを考えると、当時の社会はそこそこの活気がありながらも、落ち着いた雰囲気

なかで、のんびりとした空気が漂っているような、ある意味、昭和の最も平和な時代でもあったのだろう。そんな中、学校生活そのものが世の中の空気に同調するかのようにつつたりと流れていたような、おどろかしと和やかさがあつたように思う。もちろんその当時は、そんな時代背景など考える由もなかったのだが。

そんな高校生活だったので、特にギラギラとした興奮や追いつめられるような圧迫感など感じることもなく何となく学校に行き、当たり前のよう

に過ごしていた三年間だったような気がする。伝統のある進学校であるが故の先生方の熱心な進路指導や、避けては通れないはずの受験戦争も我々生徒にとつてはどこ吹く風、という雰囲気のまま三年の秋を迎え、いよいよ最後の白龍祭、想い出づくりにクラスが一致団結して大いに盛り上がり楽しんだ。これがその後わずか三か月間ほどの猛勉強へと私を向かわせたターニングポイントだったのだが、時すでに遅しだったのは言うまでもない。卒業間近、結果を真摯に受け止めつつも半ば愚痴をこぼすように担任の坂本先生のところ、大いに励まされたことが

また懐かしい出来事である。

そして卒業式後、高校生活最後のイベント、卒業旅行である。クラス四十四名全員が参加した二泊三日のバス旅行は、多少羽目を外しながらも、大いに楽しみ、高校時代のすべてを凝縮したような想い出深いものとなった。

別れ際に全員とがっちり交わした握手は、それぞれの道へと進む友人との別れの儀式としては最高のものであった。

時代とともに、学校の雰囲気も当然変わってきていると思うが、現役諸君には良き想い出づくりを、と願うばかりである。

我が人生 竜一OBに囲まれ



高 35 回
飯野 浩人

時折風に流され聞こえてくる太鼓の音

母校から僅か十分足らずにある自宅。夏の日差しが眩しくなる頃になると後輩たちの野球応援と思われる声に耳を傾ける。

先日久しぶりに白幡台の石段を登り詰めた。勿論きつかけはこの白幡の寄稿である。あれから三十四年...よく考えれば卒業

以来初めてだ。近くて遠い我が母校竜一高。

卒業と同時に関数は忘れたが(笑) かけがえのない恩師・仲間達と過ごした三年間は鮮明に覚えていいる。何故なら今尚、酒を酌み交わしながら竜一時代を語れる先輩・友人・後輩達、そして竜一OB達との付き合いが続いているからだ。

当時の竜一ならではの自由な校風(?)のお陰で、三年間本当に楽しませてもらった。部活・学業では全うすることが出来なかった分、体育祭・白龍祭では本業そつちのけで楽しんだことを思い出す。受験勉強で忙しい級友をよそに、クラスの出し物の台本作りに夢中になり、演出する楽しさを味わった。今の時代なら手軽にビデオがあるのにと悔やんでならない。だが無かったからこそ、良き思い出だけが残っているのかもしれないが…

地元龍ヶ崎に生まれ竜一卒の父に育てられ小さい頃、竜一の甲子園での一戦のテレビ観戦に熱中した。参考書片手に自宅前を歩く一高生に憧れた中学時代。念願の竜高生になり陸上部に入ると途中で挫折。行き場のない私を支えてくれた恩師・友人そして今尚竜一に関わる人達に囲まれている。

八十余年続く地元写真館の三

代目として、近隣学校の卒業アルバム制作にも関わっている。必ずと言っていい程各校に、竜一OBの先生方。他校で偶然再会した恩師、また教壇に立つ同級生の誇らしい姿をレンズ越しに見ることもしばしばだ。そして酒を酌み交わす仲間も竜一OB達。我が人生の周りには、いつも竜一OB。

十代の多感な時期に日々過ごす環境と、一緒に過ごす仲間との関わりが、いかにその人のその後の人生を左右するものであるか、人生の折り返し地点を過ぎた今、入学時の喜び以上に竜一卒業生である喜びを幾度となく感じる今日このごろである。

最後にこの寄稿を私などに薦めてくれた友人達にこの場を借りて心から感謝します。竜一高万歳!

これはダメ押しかな? 縁とは不思議なもので、義父・義弟も竜一OBでした(笑)

高校時代の思い出

高50回 和田 浩明

今回のお話を頂いてから改めて高校時代を振り返ってみました。担任の先生方、クラスの皆さんごめんなさい、私にとって竜ヶ崎一高での一番の思い出はやはり男子バレーボール部で過

ごした日々です。

朝練から始まり、夜遅くまでボールを拾って繋ぐ毎日、今思えば何故あそこまでやれたのだろうと自分のことながら不思議に思っています。

今でも強く印象に残っているのが週末に関東各地から複数の高校が集まる合同合宿で朝九時から夕方六時まで練習試合が続く、その後に夕食。そこで終わればいいものそこからOBチームとの夜練が始まるなど本当に一日中バレーボールをしていたことを記憶しています。当時監督、顧問だった久保田先生、諏訪原先生に長い時間お付き合いたいただき感謝しております。

その甲斐もあり、男子バレーボール部の歴史でも久し振りの関東大会出場を二年次に達成することができ、自分たちの代でも出場することができました。両大会共に一回戦で敗退してしまいましたが今でもいい思い出です。三年最後のインターハイでは優勝を目指しましたが残念ながら県ベスト8で終わってしまいました。マネージャー含めて同期六人、仲が良かったのかと言えそうですが言えなかったと思うものの良くも悪くもそれぞれと濃いつ時間を一緒に過ごせました。

私のバレーボール人生はその後意外にも続いています。高校卒業後は大学でも、社会人になってもチームを作って試合に出たいなら海外赴任になりました。しばらくバレーもお休みだと考えていたら赴任先のオランダでも在蘭日本人チームに入り、二メートルのオランダ人相手に日本人の技と根性をぶつけてきました。好きなことが出来ることで慣れない環境での色々な困難を乗り越えてこられたのだと考えています。

青春をかけた部活動



高 50 回
高橋 俊一

高校を卒業して早十九年。人生の半分以上が経とうとしている。全国高校野球を見ながらこの原稿を作成しているためか、高校時代のことを振り返ると思いつくのは所屬していた柔道部での思い出である。近年、柔道はますます国際的なスポーツ競技として注目を浴び、その技術の向上、進歩は目覚ましいものがある。しかしながら、柔道は他のスポーツとは違いあくまで武道であり「自他共栄」精

力善用」の精神性に則った人間教育が本質である。技術や体力がどんなに優れていても、土台である精神が劣ったものであるならば将来の人間形成にはつながらない。当時顧問だった羽成邦男先生からは、試合で勝つことを目標に置くことはもちろんだが、竜一柔道部の選手として恥ずかしくない態度で試合に臨み、全員がチームのために全力を出し切ることが大切だということを教えていただいた。時に練習は厳しく、また試合で負けることもあった。そのような辛く苦しい時もお互いを励まし合いながら切磋琢磨した。そして、試合に勝って喜び合い、負ければ共に涙を流し、先輩後輩関係なく絆を強く団結していった。

今考えると私は本当に恵まれた環境の中、多くの方々にサポートしていただき、柔道に日々打ち込む事が出来た。私達を温かく見守り、柔道の精神を教えて下さった羽成先生、部員一人一人の性格を把握し、勝つために今何をすればいいのかを適切に教えて下さった矢須先生には今でも感謝しています。また、竜一柔道部で出会った仲間には柔道に自信があつて入部した者、ひたすら強くなりたいが為に入部した者等、理由は様々だったが十九年経った今でも交

流があり一生の財産となつていく。このような素晴らしい経験をさせていただいたことに感謝し、竜一柔道部で学んだ事を後輩達に継承していくのが我々OBの使命だと感じている。

東京オリンピックが開催される二〇二〇年に創立一二〇周年を迎える竜ヶ崎一高の益々の御発展とあの石段を登り降りする後輩達の益々の御活躍を祈念し、結びとさせて頂きます。

正門坂が待っている



高 50 回
飯泉 充長

「もう十九年も経つのか」

改めて数えてみて驚いた。私たち平成九年卒業の代は、今年で三十七歳。今では社会人として、家庭人として、皆が各々の毎日を過ごしている。その中の一人である私は、職場の先輩の勧めでこの一月に自転車を買った。青いロードバイク。始めはフラフラおぼつかないへっぴり乗りだったが徐々に慣れ、つづば市まで毎日通勤できる程度になった。日々に埋もれつつある一高生時代を振り返ったとき、

「あの頃も自転車通勤、通学

だったな」と思った。移動の足は自転車。そこに今、帰ってきたのだ、新しい自転車とともに。

当時の私は、我が実家から一高まで二つのルートを用意していた。一本目は佐貫駅を経由して文化会館脇を通るAルート。二本目は高須橋を越えて竜ヶ崎駅を経由するBルート。

メインはAルートだ。ここをもう一度、走ってみようと思った。

佐貫駅から文化会館までは長い直線が通っている。田園風景を貫く道路に防風林はない。冬は向かい風をのしりながらペダルを漕いだ。回れ右をしたくなる日もあった。一高の制服は、重かった。この風に打ち勝てば一高の入口は目の前だ。

正門坂。

二ツ折れの坂道。測ってみたら等距離の折り返しで、二百四十メートル。高さはおよそ三十メートルだ。前半は易しい。勾配が緩いからだ。通学用自転車でも座って上れる。折り返しでペーシングが落とされる。勾配がきつくなる。同じ距離でも今度は立ち漕ぎだ。息が上がる。自転車を降りて押す生徒も多い。

車は上っていく。原付も上っていく。横目で見える度、「くそッ」と思っていた。

ロードバイクはすいすい上つ

で行った。折り返しも後半の勾配アップも意に介さない。正門が見えた。通ったことのない新校舎も見えた。変わらない坂があったから、自分の成長が分かったのだ。

いつかまた、この坂を上ろうと思う。

マルキン・男クラ



高 60 回
藤田 光

書きたいことは色々あるが、「マルキン」「男クラ」について寄稿する。

「マルキン」竜一陸上部の思い出は中華料理マルキンの話なくしては語れない。高一の県総体後に先輩に連れていってもらった。以来、休日の練習や大会の後にはよく通うようになった。疲れた体には裏メニュー(今はもう表メニュー?)の焼肉丼で元氣をつけた。何度も通ううちに店長とも仲良くなった。近況報告をしたり、息子の少年野球のビデオを見せてもらったりした。

平成二十四年、修士一年の私は竜一で教育実習を行った。緊張しながら臨んだ初めての授業終了後、一人の生徒が私に声を

かけてくれた。「自分、マルキンの息子です」卒業してから五年後、マルキン店長の息子に授業をするという巡り合わせもあった。竜一陸上部OB・OGのみなさん、懐かしのマルキンへまた行きましょう!

「男クラ」私は理系物理コースを選択し、男子だけのクラス「男クラ」で高二〜三を過ごした。体育の授業後(特に夏)は、男クラでは異臭騒ぎが多発した。原因は皆思い通りのメーカーの制汗スプレー噴射によるものである。体育の次の授業、先生が教室の扉を開けた瞬間の「臭っ!」の一言は男クラ名物だった。そんなむき苦しい男クラを、担任の横倉先生はまとめてくれた。担当教科の数学では土浦一高にも負けない数学力を付けてくれた。球技会の綱引きでは2連覇(だったと記憶)に導いてくれた。スローガンとして掲げていた「スローパー」なクラスだったと思う。男クラメンバーの絆は強く、卒業してからもたまに男クラ飲みが開催されている。私自身大学時代は北海道にいたため参加できなかったが、就職で関東に戻ってきたので次回の男クラ飲みは是非とも参加したい(スガシ君よろしく!)

以上がほんの一部であるが私

の母校の思い出である。共感して思い出し笑ってくれる方がいたら幸いである。

最高の三年間



高 60 回
国松 侑夏

「受験番号六十七:あった!」そこから私の高校生活は始まった。

高校生活といえば吹奏楽部が切り離せません。当時は部室がなくプレハブでの活動。汗を流しながら合奏した夏、体が芯から冷え手足が痺れた冬。隙間風はもちろん、地震で倒壊するような環境にも負けず部活動に励みました。

中学時代と異なる楽器に苦戦した私は、白龍祭で演奏する同級生から遅れをとっていました。一人別室での個人練習、隣から聞こえる合奏に悔し涙を流したことも。思い通りに吹けず、投げ出したいと何度も思いました。そんなとき親身になって話を聞いてくれた友人。楽しいときも辛いときも一緒に過ごしてきた吹部の友人は一生の宝物です。

部活での思い出の一つは定期

演奏会。寸劇や小道具・照明などの演出、ポスターやパンフレットなど各班に分かれて自分たちで創りあげました。定演の準備を通して部員との関係がさらに深まりました。また、この定演はOB・OGの先輩方と親睦を深める良い機会でもありました。二十歳近く離れた先輩と同じステージに上がり、先輩方の素敵な音色に包まれながら、会場いっぱい竜一サウンドを響かせました。たくさんのお手伝いをいただき、みんなの思いの詰まった定演は最高の思い出です。

そしてもう一つ、野球応援。球場へ向かうバスの中、大声で校歌や応援歌を熱唱し牛久大仏に向かって勝利を祈りました。試合中は私たちの演奏に合わせて竜一生が一つとなり、声が囁れるまで声援を送りました。後半で巻き返し逆転勝利を掴んだ水戸一戦、延長に持ち込み最後の最後まで力を振り絞った水戸葵陵戦。白熱した試合から目を離すことができず、部員一同演奏を通して必死に応援しました。試合後、スタンドめがけて走ってくる野球部員の姿には、込み上げてくるものがありました。試合後に歌う校歌は格別。こんなにも誇らしげに歌ったことはありません。

卒業して九年目を迎える今でも当時の思い出は色褪せることなく、再会すれば学生時代の話に花が咲きます。貴重な三年間をここ竜ヶ崎一高で、六十回生として過ごせたことは、誇りであり大変嬉しく思います。勉強に励み、将来を考える機会も充ててに恵まれていた三年間。竜一は私にとって心から「居場所」と思える場所です。これから母校「竜一」が発展し続けることを祈っています。

白幡の青春



高 60 回
麻生 裕恵

六十三段の階段を見上げるとその重厚さに身を引き締められる思いでしたが、ある日ばかりはその階段が色彩豊かな看板とともに校舎へと訪れる者を導き、頭上からはたくさんの明るく楽しい声が降り注いできました。そう、白龍祭の日です。これほどわくわくする日といえ、クラスで出し物やお揃いのTシャツについて考えた日々、そして、実行委員として白龍祭制作に携わった日々を思い出します。

ます。準備期間になると、自分の担当であるオブジェの制作とスタッフによる創作ダンスの振り付けで頭がいっぱいの毎日でした。この白龍祭を支えるスタッフは全員熱い情熱を持っているため、時にはぶつかることもありましたが、全員が丸くなって白龍祭の成功に走り続けました。そのため、白龍祭の最後に全校生徒での合唱が終わることが何よりも寂しく思っていたことを思い出します。そんな白龍祭の思い出の品として、スタッフ証を大切に保管しています。この裏には生徒会長や白龍祭実行委員長からのメッセージが書かれており、これに気付いたときには嬉しくてひっそりと感涙にむせびました。この日々があったからこそ、一つの目標にチームで動くこと、また、チームの上に立つ人間がどのようにチームを動かすのかを学ぶことができ、その経験はその後の大学生活や現在の社会生活の糧になっています。

この文章を書くにあたり、卒業アルバムや白幡、そして学年の先生が開設してくださったブログなど、思い出の品々を見ながら竜一で過ごした日々を振り返っていました。入学試験の時には異常に長く感じた六十三段。あの日乗り越えて迎えた三年間では、切磋琢磨したかけがえのない仲間ができました。そして私たちを温かく見守ってくださった多くの先生方に出会えました。

竜一での出会いや経験、校訓を忘れることなく、そして六十回生ということを誇りに思いながらこれからも日々邁進していきたいと思っています。

母校と私の人生

これからの時代を担う人材を育成する環境の整備



高 27 回
清原 洋一

母校を卒業して四十年以上が経過、その間に教諭としても七年間勤めました。現在は、文部科学省にて初等中等教育行政にかかわっていますが、勤務地を東京に移してから十五年が過ぎようとしています。その仕事のなかでも、印象深いものの一つがスーパーサイエンスハイスクール(SHS)事業です。このSHSとは、将来の国際的な科学技術関係人材を育成するため、先進的な理数教育を実施する高等学校等を、文部科学

省が「スーパーサイエンスハイスクール」として指定し、学習指導要領によらないカリキュラムの開発・実践や課題研究の推進、観察・実験等を通じた体験的・問題解決的な学習等を支援するものです。平成十四年度に開始、この事業が始まる直前の二月に赴任しました。特にこのSHSが軌道に乗るまでの数年間、主担当である科学技術政策の部局や具体の運営を担当する科学技術振興機構の担当者との議論を交わしたことが思い出されます。

これらの部署は、もともと科学技術系の研究を担当するところです。SHSという新しい教育施策が開始されても、研究費の扱いに慣れている大学や研究所と同じような対応になってしまっていました。もちろん彼らも努力していたようですが、学校や教職員への配慮は不十分であるように私は感じていました。そうした運用面の改善、あるいは科学技術系人材の育成を施策としてどのように進めていったらよいかといったことについて、激論を交わしました。この活力の源になったものは何か。そう振り返ったとき、大きな影響を与えているのは、竜一高での三年間、そして教鞭に立った七年間だと思います。ま

ず、高校時代、将来を夢見つつ、目先のことでなくじっくりと育てる雰囲気、白幡台にはありました。例えば、観察・実験、今に比べれば機器の数が少ない中で、その工夫としてでしょうか、各班すべて異なる実験を行い、レポートを作成したことを覚えていています。大卒のテーマは設定されていますが、その具体は、実験の目的、方法など、すべて生徒が班で話し合い決定して実施し、実験レポートとしてまとめ提出するというものでした。ある意味、生徒の主体性をもたにした課題研究に近いものでした。これは一例ですが、先生方の指導は、それぞれに个性的であったことを記憶しています。

また、教鞭に立った七年間では、物理をはじめ理科の科目を担当しました。やってみようとする気持ちを育てるのがまず第一と、普通教室で行う授業でも手軽に行えるような実験装置を持ち込んだものでした。また、夢を育むために学術の専門家をお呼びしての出前講座に、協力して手がけたことも思い出します。

今、竜一校はSSHに指定され活動しています。これも先生方の熱意、結束そして努力の成果ですし、生徒もそれに答えていることでしょう。全国のSSHが集まる今年の成果発表会で、その一端ですが間近に見ることができました。竜一高の益々の発展をお祈り申し上げます。

(文部科学省 主任視学官)

人生の岐路、人との出会い



高 29 回 康夫
楠

三つ上の兄の影響で陸上競技の長距離をやるようになり高校でも続けようと思っていました。当時、陸上をやるなら土浦三高がいいと言われましたが、文武両道を目指し勉強も運動もできると思い竜ヶ崎一高を選びました。そこで出会った人が、その後の私の人生に大きな影響を与えてくれました。

私が母校に在籍したのは昭和四十九年度～五十一年度の三年間、入学の年に茨城国体が開催されました。その関係で茨城県の教員に採用され竜ヶ崎一高に着任されたのが齊藤(現・香取)正樹先生です。中京大学を卒業したばかり、百m十秒六(当時日本ランキング八位)の実績を持つ先生は、現役を続けながら

陸上部の顧問も担当、私もその一員になりました。

着任したばかりの若い齊藤先生が、練習の合間に聞かせてくれる陸上競技の話は高校一年生の私にはどれも新鮮で面白く、授業が終わって部活の時間が来るのを心待ちにするようになっていきました。中でも一番思い出深いのが、国鉄のストライキで数日間学校が休校になった時、先生の住んでいた教員宿舎に泊まり、陸上部の仲間と合宿と称した強化練習をした時のことです。初めて接した一流の陸上競技の世界の話は本当に面白かったです。いつしか勉強はそっちのけ、陸上競技にのめり込んでいきました。

そんなある日、先生が「楠、陸上競技で強くなれば大学にも実業団にも行けるぞ」と話してくれました。私にとつて初めて聞いた話でもあり、そのことをすぐに親に伝えたところ「そんな話は聞いたことがない!陸上競技では飯は食えない、いつまでもやらざる勉強をやれ」と一蹴されてしまいました。

しかし、私はその後も、保健体育の授業の時に話されるオリンピック陸上競技の話などにのめり込んでいきました。クラスメイトはあまり興味を持っていないようでしたが、私には大変心躍らされる話でした。正直残念ながら母校での勉強の思い出は少なく、陸上部で過ごした時間が私の高校生活と言えると思います。そんな楽しい三年間はあつという間に過ぎ去りました。その後は、私にとって「先生の言われたこと」そして「親が言っていたこと」への挑戦の始まりでもありました。

齊藤先生と当時の野球部監督の持丸修一先生の薦めもあり、駒澤大学に進学することになりました。全国インターハイにも行っていない、県大会五〇〇〇m六位の実績しかなかった私でしたが、大学では四年連続で箱根駅伝を走りました。その実績から、実業団三社から声をかけて頂き、最も印象の良かったヤクルト本社に入社しました。その後は、長距離界では知らない人のいない瀬古選手、宗兄弟、中山選手、谷口選手など当時の名だたる選手たちと駅伝、マラソンなど多くのレースで走り競うことが出来ました。高校時代齊藤先生が教えてくれた道を歩むことができたこと、それは、今振り返っても鳥肌が立つ素晴らしい時間でした。

二十八歳で現役を引退して結婚。その後は、ヤクルト本社営業部七年、販売会社の営業十三年、陸上競技とは離れた生活を送っていた私ですが、「子ども達に陸上競技の楽しさを伝えたい」と思い、当時年長と小四だった二人の息子の友達十一名で二〇〇〇年一月にスタートしたのがスポーツ少年団アスレッククラブです。それを母体に二〇〇四年七月にNPO法人阿見アスリートクラブを設立。私が四十一歳の時です。退路を断って、クラブ経営に集中したいとの思いから二〇〇六年二月二十四年十一月勤めたヤクルトも辞めました。あれから十七年の歳月が過ぎ現在に至っております。

陸上競技の世界にはなかった、ジュニア世代(小・中・高)の選手を一貫指導の出来る仕組みを作りました。その後、大学、実業団に送った選手が世界を目指す、引退しても、生涯スポーツとしてクラブで走る。そんな世代間育成システムを確立することができました。まずは二〇二〇年東京オリンピックに出場できる選手が出てくるものと信じております。

高校時代に齊藤先生に出会ったことで開けていった私の人生。その先生は、現在、コーチとしてクラブに関わってください、ずっとこのクラブをそして私を支えてくださっています。

最近、竜ヶ崎一高の出身者

の皆様にもクラブにご支援頂けるようになり、改めて母校の出身者のご活躍も少しずつ知るようになりました。常に地域貢献・社会貢献を意識する NPO 法人の代表を職にしていると、改めて母校での人との出会いを大切にする。そんなことも感じるようになってきました。

皆様の御健勝をお祈りいたします。

(特定非営利活動法人
阿見アスリートクラブ代表)

金融業界に生きて

高 41 回 梅基 彰史

気が付けば竜ヶ崎一高を卒業してからそろそろ三十年にもなるうとしています。すっかり母校とは疎遠になってしまいましたが、今でも白幡台の石段と授業中に校舎の窓から見たのどかな風景が思い出されます。竜一時代は部活動に所属せず、漫然とゆるい毎日を送った私にとつて、今、仕事で緊張感ある場面に遭遇すると、あの高校時代のゆつたりとした時間の流れを非常に懐かしく感じる 때가 あります。

思い返すと目的意識の弱い竜一生涯でした。竜一時代は、何かを成し遂げたということはなく、大学受験に向けた勉強と野球部

の甲子園に向けた試合応援の記憶が特に残っています。今思えば、一度しかない高校時代にもう少し意識高く様々なことに取り組みでおけばよかったとも思います。もちろん今だからそう思うという面もあるのかもしれないのですが。

竜一卒業は、昭和から平成へ元号が変わった年です。大学に入学するとベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦が終結。そして、日本ではバブル経済が崩壊し、失われた二十年とも言われる長く暗いトンネルに入らんとしていました。そんな時代が大きく変わりつつあるなか、法曹界を目指したものの願い叶わず、銀行に就職することにしました。採用面接では好奇心が強いので様々な会社の事業に関係したいとアピールしたことを今でも憶えています。実際、銀行では、若くしていろいろな会社の事業に触れることが出来ました。なかなか得難い経験をさせてもらったと思います。そうこうするうちに金融機関の不良債権問題が起きました。二〇〇〇年前後の出来事です。自分が働く銀行も金融再編により違う銀行と統合し新しい組織を創り始めることとなりました。私は、その後不良債権処理そして企業再生の仕事につきました。新聞を賑わ

した企業の再建は救急病院での手術と同様、時間との闘いでもありました。気力も漲り、より良い結果に向けて全力投球したことを憶えています。次に、銀行の業界団体の仕事もしましたが、それは一つの会社に染まりつつあった自分にとって視野を広げてくれるものでした。最近でも、昨年から異業種交流会に参加しました。官民一緒に日本の明日を考えると、今の日本の危機的な状況を冷静に見つめ、そして議論し、今後どうしていくべきかを考える良い機会でした。また、自分と違う社会人生活を送ってきた人たちと一緒に時間を過ごすことによつて異なる世界に触れることができ、好奇心も満たされました。

自分の年齢は四十六歳です。竜一で学び卒業してから、かなりの時間が経過しましたが、まだまだ長い人生が待っていると思います。これからも、好奇心を大切に、世の中のために微力ながらも自分に出来ることは何なのか自問自答していきたいと思う今日この頃です。

最後になりましたが、母校竜ヶ崎一高の益々の発展を祈念いたします。
(株式会社フィナンシャルグループ勤務)

竜一時代が、これからの仕事の原点



高 42 回
三原 聡子

同期の皆様、またお世話になりました先生方、吹奏楽部等の先輩・後輩の皆様方、お元氣でお過ごしですか？高校時代の私は、竜一と竜一生の皆様の良い懐をお借りし、たくさんのお返しをいただき、様々な失敗、高校時代にやりたかったことをはじからやらせていただいたように思います。加えて、誰よりも勉強をしない生徒で、いつか自分が同窓会会報に寄稿させていただけの日が来るとは想像もしておりませんでした。当時の先生方、先輩方、同期の皆様には多大なるご迷惑をおかけしたのではないかと思っております。また、どなたかを深く傷つけることがあったかもしれません。この場をお借りしてお詫びします。お恥かしい限りです。

高校卒業から約二十五年の月日が流れたことは信じられません。朝の竜鉄で話した友達の笑顔、隣のクラスの子に世界史の教科書を貸したら、センスの良い落書きだらけにして返してくれたこと、文化祭でバンドを

組んで演奏したレベッカやプリプリ、学校のそばにあった龍舎という喫茶店で部活の皆とピザを食べたこと、真夏の炎天下の野球場での応援など、楽しかった思い出もほろ苦い思い出も、今でも鮮明に脳裏によみがえってきます。

そして思春期の混乱で自分を持て余す中で、いつか思春期の子供の援助ができるような臨床心理士という仕事につきたいと思ったのも竜一生の時でした。現在、私は神奈川県にある独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターという海の目の前にある病院で、心理療法士をしています。久里浜医療センターは、二〇一一年七月に日本で初めてネット依存専門治療を標榜した外来を立ち上げました。それから五年が経過しましたが、現在では鹿児島から北海道まで、全国から患者さんが来てくださっています。その八割が中高大学生です。毎日、当時の自分と同じ年齢の子供たちの話を聞いたり、心理検査を行ったり、一緒にスポーツをしたりしています。

現在、世界保健機関 (WHO) は、国際疾病分類 (ICD) を改訂中です。この中に、ネット依存の診断ガイドラインを組み入れられ、WHO と緊密に

協力しながら、様々なプロジェクトに参加しています。写真は二〇一五年にWHO本部に行かせていただいた時のものです。高校時代に勉強しなかったつけをいまだに必死になって払い続けている次第です。

思春期の子供たちと関わる仕事ができていることは幸せなことだと思っています。しかし問題をかかえる子供たちと会いながら、当時の自分になりたかったような、いくばくか子供たちの役に立てる心理士になれているだろうかと考え、まだまだとても届いていないと恥ずかしくなります。これからも、一時代は私の仕事の原点であり続けるとしています。

最後になりましたが、伝統ある竜ヶ崎一高同窓会会報に寄稿させていただく機会を賜りまして誠にありがとうございます。

(独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター 主任心理療法師)

多士済々⑥

大野誠夫と三名の学友

鹿野 勝政(高13回)

旧龍中時代の大野誠夫(ペンネーム浅間農夫)には、特別に仲の良かった三名の学

友がいた。その方々の名は鈴木博(ペンネーム鈴木比露思)そして平山寛(ペンネーム真木龍一郎)と片山文男(ペンネーム片山美夫)です。

片山文男は残念にも在学中に病に倒れ早逝されてしまった。最近彼の生家から彼の遺稿集が見出されたので彼のことを紹介させていただきま

す。彼は大正三年三月二十五日につくばみらい市足高(旧筑波郡久賀村足高)に生まれています。奇遇にも大野誠夫と誕生日が一緒です。

この地は谷原三万石の東端の高台に位置しており、南に田園が広がり、その彼方には雪を冠った富士山が見え、集落を北に向かって進むと広々とした畑地があり、そこから北東に牛久沼が見渡せ、北西に目を転ずれば紫に聳える筑波山を望むことが出来る、緑豊かな台地です。彼がこの台地から詠った四首、

・起き出てうれしきものは南空の朝日に映えし富士の秀麗
・雪積みて筑波の山に生ふる樹の木並はあらはに見えにけるかな
・眼前にかくさふ霧のはれゆきて眼にすがすがし筑波の山は
・雨やみてうす陽は丘に匂ひをりしきりに百舌鳥の鳴きすましつ、

二年生のときに赴任されて来た長南俊雄先生の指導のもと彼らはますます短歌の世界に入り込み、多数の歌を競って詠った。そして短歌結社「ささぎ」にも数多く投稿した。そんな彼を不幸にも病が襲い、彼は学業半ばにして休学し、病氣治療に専念したが病状は回復せず、十八歳を間近に控えた昭和六年一月二十一日、帰らぬ人となった。

彼の訃報を聞いた長南先生と学友達は嘆き悲しみ、号泣したと言う。そして彼の霊を慰めるために、彼の書き残したノートや手帳から、約二百八十首を選び、ガリ版で刷り上げ四十五頁に及ぶ遺稿を編んだのです。

長南先生の提案で彼の大好きなこの台地をイメージして「丘」と銘打って、彼の霊前に供えられました。

長南先生の巻末言に、「片山美夫は『ささぎに』をとほして、その将来を期待されていたのに遂に此の春、十八歳を迎えて間もなく逝去された、何といっても悲しい損失である」と書かれている。

こんな素晴らしい先人がいたことを誇りに思うと同時に、会員の皆さんにも知っていただきたく拙筆を執りました。

た。

なおこの遺稿を大切に保管されていた御仁は、永らく茨城大学付属小学校で絵の指導をされていて、十数年前に故郷、つくばみらい市に戻り、白寿を迎えようとしている今日も豊饒と絵筆を走らせている、片山八重子画伯です。片山画伯は文男の八歳下の妹で、当時片山家を訪れて、離れの間で楽しそうに語り合っていた四人を知っている、唯一の御方です。

最後に三人の仲間が称賛した一首を紹介して終わりとします。

・遠く鳴く蛙の声のしたしもよいたつきの身を 湯にひたしつ、

トピック

白龍祭「餅つき」

小嶋 吉浩(高31回)

今年の白龍祭は六月三日(金)、四日(土)に開催され、一般公開の四日は、天候にも恵まれ多くの人が来場されて盛大に行われました。

当日は、朝早くから多くの同窓生の協力を得てテントの設営から看板設置、臼、杵や餅米の準備も整い、一般公開開始と共に餅つきを開始しま

した。

染谷同窓会会長と校長先生二人による餅つきをはじめ、飛び入りの生徒、そして来場した一般の方にも餅つきを経験していただき、多くの皆様方に喜んでいただいたと思います。

時には、購入するお客様に、二十メートル位の長蛇の列が出来てしまうほど盛況でした。並んで待つお客様も、若い同窓会員が汗だくで餅を搗いている姿を見て、美味しいお餅がまもなく出来上がることを想像すれば我慢も出来るようです。

また、今年はおそろいのユニフォームを作成して、参加した同窓生も年齢を忘れ一致団結して餅つき、餅を丸め、接客をして白龍祭に参加し、気持ちは高校時代にタイムスリップしたようでした。



全日本大学駅伝
チーム（青山学院大）優勝
第六区 区間賞、大会 MVP 獲得
森田 歩希（高 67 回）



第 67 回生森田歩希です。現在は青山学院大学陸上競技部に所属しています。今年の十一月六日に行われました全日本大学駅伝ではメンバーとして第六区を走ることができました。結果は、チーム優勝に加えて、区間賞、そして MVP を獲得することができました。今回の駅伝で多くの方から応援され、注目される選手になることが出来ました。私は竜ヶ崎一高で陸上競技・長距離をやりたいと入学しました。中学校では五〇〇〇m の日本記録を更新し、高校一年の時には五〇〇〇m で高校一年歴代記録上位のタイムを出すなど順調に進んでいきました。しかし高校一年秋の県駅伝で左足の腓骨を疲労骨折してしまいそこから故障の連続でした。自己記録を更新することもできずにつらい時間が多くありました。そ

んな時に竜ヶ崎一高陸上競技部の顧問である内田先生や川口先生、陸上競技部の仲間、そして竜ヶ崎一高のたくさんの先生方に支えてもらい、時には叱ってもらい私はあきらめることなく陸上競技を続けることができました。

また竜ヶ崎一高は進学校ということもあり勉強が大変でした。入学して初めて受けたテストでは学年で下から六番の成績でした。しかし高校二年のあたりからは成績も上位に入ったり、数学では学年一位を取ることもできました。そういった陸上競技や勉強の努力をすることで速い選手ではなく強い選手に少しずつ近づくことができました。私が竜ヶ崎一高で過ごした日々、陸上競技部での経験はかけがえないものであり、私を人として成長させてくれた時間と場所だと思っています。これから竜ヶ崎一高で学んだことを忘れずに今まで支えてくれた人のためにも陸上競技・駅伝での活躍という形で恩返しをしていきたいと思っています。そして将来、母校で教員・指導者として後輩である竜ヶ崎一高生を指導できることを願っています。応援ありがとうございます。お願いします。これからもよろしくお願ひします。

毎日新聞『ぐるっと首都圏・母校をたずねる』

平成 28 年 9 月の第一金曜日から毎週金曜日に毎日新聞の『ぐるっと首都圏・母校をたずねる』のコーナーで竜ヶ崎一高の OB・OG 12 名の皆さんのインタビュー記事が掲載されました。記事は「インタビュー本記」とインタビューの内容に関連した「別稿」から構成されており、それぞれ以下のようなタイトルでした。記事の詳細は竜ヶ崎一高の HP (<http://www.ryugasaki1-h.ibk.ed.jp>) や白幡同窓会の HP (<http://www.shirahata.sakura.ne.jp>) でご覧いただけます。

- | | |
|--|----------------------------------|
| 第 1 回『「未来」は自ら切り開く』ビックカメラ社長 宮嶋宏幸氏（高 30 回） | 別稿 地元期待 1900 年創立 校章に 2 頭の竜 |
| 第 2 回『怠惰と決別 外交官に』元コンゴ大使 北沢寛治氏（高 18 回） | 別稿 文化祭では旧字体踏襲 49 年に校名を龍→竜 |
| 第 3 回『多様性支えた包容力』中国地域研究者 田島英一氏（高 33 回） | 別稿 浪川商店のゴムそば 部活動帰り 胃袋満たす |
| 第 4 回『射撃通しアクティブに』青山学院大 3 年 鎌田早伎氏（高 66 回） | 別稿 密室で集中力養う 何度も全国 V の強豪部 |
| 第 5 回『芸人志望も認める校風』小説家 藤崎 翔氏（高 56 回） | 別稿 真心で客集める OB うな井「発祥の地」の老舗 |
| 第 6 回『柔道部で苦しくも楽しく』農林水産省畜産部 羽島 瞳氏（高 57 回） | 別稿 進学モデル校、SSH 指定 教諭が協力 生徒の可能性考える |
| 第 7 回『自由の風に導かれて』陶芸家 植竹 敏氏（高 27 回） | 別稿 新校舎に卒業生の作品 多くの芸術家を輩出 |
| 第 8 回『厳しい練習 仲間が支えに』高校野球指導者 持丸修一氏（高 19 回） | 別稿 勉強と部活動両立 「甲子園」には 10 回出場 |
| 第 9 回『温かい応援あつてこそ』元日航空客室乗員部長 荷見三七子氏（高 13 回） | 別稿 戦後、男子校から共学へ 「二十六の瞳」話題に |
| 第 10 回『自分の限界 決めないで』声優・俳優 豊嶋真千子氏（高 42 回） | 別稿 通学支えるミニ路線 わずか 3 駅 関鉄竜ヶ崎線 |
| 第 11 回『なに一つ無駄はない』龍ヶ崎市長 中山一生氏（高 33 回） | 別稿 より良さ教育環境を 卒業生の募金で白幡会館 |
| 第 12 回『縮こまらず、世界に視野を』柔道家 岡野 功氏（高 14 回） | 別稿 64 年東京五輪 生徒らに高揚感 |
| 第 13 回『卒業生 それぞれの思い出』 | 別稿 生徒と先生 絆強く |
| 会社員 石川るい子氏 会社員 綿貫哲也氏 地方公務員 大野雅之氏 | 元 NTT 勤務 高野 昇氏 整骨院院長 小菅陽彦氏 |

白幡同窓会ホームページを立ち上げました

白幡同窓会では平成 28 年度の事業として計画してまいりましたホームページを 7 月 21 日付で正式に立ち上げました。

URL アドレスは以下の通りです。<http://www.shirahata.sakura.ne.jp>

会員の皆様に白幡同窓会をより身近に感じていただきたく、同窓会からの情報発信のひとつとして新鮮な情報をお伝えすることを目指して行きたいと考えております。

ホームページには新着情報、同窓会からのお知らせ、同窓会の開催情報、竜一の歴史、竜一コレクションなどを用意しており、内容につきましては今後充実したものにしていく予定です。

特に会員の皆様からの学年同窓会、部活 OB・OG 会の開催予定情報などをいただき、お伝えすることで同窓会の活性化に貢献できればと考えておりますので、ぜひご連絡ください。

ホームページのご意見、ご希望等がございましたら同窓会事務局までお知らせください。 櫻井 篤美（高 29 回）

進路状況

北海道大学	2名
東北大学	3名
筑波大学	19名
東京大学	1名
一橋大学	1名
東京工業大学	1名
慶應義塾大学	2名
早稲田大学	11名
東京医科大学医学科	1名

本校では、入学直後の導入期指導「Rプログラム」（九年度目）、筑波大学合格をめざす「筑波大研究委員会」（八年度目）、医学部・難関大学合格をめざす「Rマスト」（七年度目）などを柱とする進路指導が展開されています。その成果は着実に現れており、毎年安定した進路実績を残しています。さらには文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）校の指定を受けて三年目となり、協働的探究活動も本格化し「たくましい科学系人材」の育成を図っております。学年の枠を越えた学校全体での進路指導体制が整い、学校の指導力が確かなものとなってきてい

るとも感じています。

昨年度の入試結果は、国公立大学合格者が一四五名を数え、七年連続一〇〇名以上を達成するとともに、現役一三五名合格はこれまでの最高記録となりました。中でも、東京大一名、一橋大一名合格（いずれも過年度卒）は特筆すべきであり、他にも北海道大二名、東北大三名、筑波大十九名、東京工業大一名、お茶の水女子大二名、東京外語大一名、九州大一名（過年度卒）など難関大合格者が多数出ています。また、私立大学では難関大学の慶應義塾大二名、早稲田大十一名、上智大六名の他にGMARCH（学習院・明治・青山学院・立教・中央・法政）と呼ばれている大学に一三〇名以上の合格者が出ています。また二年続けて東京医科大学医学部医学科に合格しています。（私立大の合格者数は現浪合計数）

さて、大学入試全般を振り返ってみると、二十八年大学入試は全教科・全科目で新課程対応となった初めての入試であります。ただし、二十七年入試のような旧課程履修者に対する「経過措置」は、センター試験を含めて原則として講じられませんでした。前

年度、数学と理科において新課程の先行実施で行われた大学入試センター試験では、得点調整が行われる事態となりましたが、今回の試験では特に目立った混乱もなく実施されました。文系学部にも人気の揺り戻しが生じていることも今回の入試の特徴です。

ところで、国公立大学の個別試験は一部の公立大学の中期及び別日程を除き、同一募集単位の入学定員を前期と後期に振り分ける「分割」と、前期の合格者が入学手続きを完了してから後期試験を行うという、前・後期試験の「分離」とを組み合わせた「分離分割方式」が平成元年より実施されており、後期募集を縮小・廃止し（前・後期の定員比率の弾力化）、前期集中化や推薦・AO入試の導入・拡大を図る、所謂「分離分割方式」の弾力化が現在一層強く推し進められています。

国公立大学で「推薦・AO入試」が増加し（推薦・AO入試の募集人数は、全国で約二万三千人に）、国立大学の推薦入試は東京大・京都大の新規実施を含め七十七大学に、AO入試は宇都宮大・京都大・宮崎大の新規導入を入

れて五十大学にまで増加しています。

本校の生徒も、国公立大学の出願にあたっては、後期試験の廃止・縮小を行う大学が相次いだため受験したい大学が見つからず、実質前期一本勝負となった者もいました。そのような厳しい状況ではありましたが、生徒たちは果敢に挑戦してくれました。結果は上述したとおり素晴らしいものでもあります。生徒一人ひとりの努力は勿論のこと、全

職員で三年生を支援する体制が敷かれており、学校一丸となって試験に立ち向かえた成果であると感じています。

受験は人間を大きく成長させます。生徒たちには、大学受験を通して、困難に立ち向かい、それを乗り越えていく逞しさを身に付け、社会で活躍できる人間に成長していただきたいと思います。

高野 健二（高37回）

平成28年3月進路状況一覧

◆国公立大学合格者数

大学名	現役	過年度	合計
北海道大	2		2
帯広畜産大	1		1
室蘭工業大	1		1
弘前大	1		1
東北大	3		3
山形大	2	1	3
福島大	1	1	2
茨城大	41	1	42
筑波大	19		19
埼玉大	10	1	11
千葉大	7		7
東京大		1	1
一橋大		1	1
お茶の水女子大	2		2
東京学芸大	1		1
東京工業大	1		1
東京外大	1		1
電気通信大	3		3
横浜国立大	1	2	3
新潟大	1		1
信州大	1		1
静岡大	2		2
九州大		1	1
琉球大	3		3
創路公立大	4		4
秋田県立大	2		2
県立米沢栄養大	1		1
茨城県立医療大	8		8
高崎経済大	1		1
群馬県立女子大	1		1
首都大東京	5	1	6
横浜国立大	2		2
横濱文科大学	3		3
山梨県立大	1		1

大学名	現役	過年度	合計
長野県看護大	1		1
富山県立大	1		1
高知工科大	1		1
国公立大学合計	135	10	145

◆主な私立大学合格者数

大学名	現役	過年度	合計
獨協大	16	1	17
文教大	15		15
青山学院大	10		10
学習院大	12	3	15
北里大	9		9
共立女子大	6		6
慶應義塾大	1	1	2
駒澤大	23	1	24
上智大	5	1	6
順天堂大	7		7
芝浦工大	13	3	16
成蹊大	6	2	8
成城大	13		13
専修大	4		4
中央大	14	2	16
東京医科大	1	1	2
東京女子大	5		5
東京農機大	25		25
東京農大	13	6	19
東京理大	20	9	29
東洋大	29	1	30
日本大	53	7	60
法政大	39	4	43
明治大	22	4	26
明治学院大	9		9
立教大	27	1	28
早稲田大	9	2	11
その他	259	3	262
私立大学合計	665	52	717

先輩の語る仕事を聴く会

平成二十八年十一月五日(土)



第一学年では、文理選択を考えたための取り組みのひとつとして、毎年この講演会を実施しています。今回は十一名の人生の先輩をお招きし、それぞれ以下のような演題で仕事のやりがいや面白さなどについて語っていただきました。講師の皆様、ご協力ありがとうございました。部をご紹介させていただきます。

『私の進路選択と技術者という職業』
日本サポートシステムソフトウェア設計製作

秀島 昌行氏 (高30回)
「生徒さんの態度等は大変良いものだったと思います。このような講演会を経験できる生徒は幸せだと思います」

『学ぶことの意味』

有川法律事務所 弁護士

有川 保氏 (高33回)

「生徒さんが真面目に話を聴いている姿がとても良かったです。今後の生徒さんの勉強の一助になれば幸いです」

『まちづくりのためにできること』
龍ヶ崎市役所 市民協働課

鎌倉 克彦氏 (高44回)

「講師のお話をいただいた時には、在校時の思い出をたくさん振り返ることが出来、良い経験になりました」

『ものづくりの喜びと着想から実現までのいろいろ』
(株)デンパン 研究開発 研究職

丹治 昭夫氏 (高44回)

「昨年に引き続き、とても熱心な目つきで話を聴いている様子が感じられ、話をする側も熱が入りました」

『運・可愛げ・専門性』
農研機構 農業環境変動研究センター 研究職

飯泉 仁之直氏 (高49回)

「生徒の皆さんは、進路は考えても就職についてはイメージがあまりないようで、興味深く聴いていたようです」

『街をつくり、幸せをつくる』

野村不動産 本社 人事部

古澤 悠貴氏 (高58回)

「高校からキャリア教育を実施するのはとても良いことだと思います。今回限りではなく、継続的・恒常的にキャリアについて考えようとする姿勢ができれば更に良いと思います」

『旅行を通して地域貢献』
近畿日本ツーリスト つくば支店

山間 省悟氏 (高62回)

「自分の仕事をリアルに話すことで自分自身に言い聞かせることが出来、仕事の再認識が出来ました」

『人を見るということ』
筑波メディカルセンター 病院看護師

野々村 優希氏 (高63回)

「講演をする中で生徒さん方の生の声を聞くことができ、自分が看護師を目指すという動機や、大学合格に向けてひたむきに頑張っていた頃を思い出すことができました」

『食品・栄養系ってどんなところ?』
カネク株式会社 研究室 商品開発

吉田 真奈美氏 (高64回)

「とても真面目で素直な生徒が多いという印象でした。きちんと話を聴いてくれる姿勢や眼差しに、話をするのが

楽しくなりました」

『世界とANAを繋ぐ航空会社で働くということ』
ANA 成田エアポートサービス 旅客サービス

佐久間 智子氏 (高64回)

「今年入社したばかりの私の話をこんなにもキラキラとした表情で真剣に聴いてくださり、大変嬉しく思っております」

『研究する人生 生物工学者の例』
電力中央研究所 環境科学研究所 研究職

渡部 良朋氏 (元PTA役員)

「学ぶことの意義や意味を考えるきっかけになるお話が出来たら良いなと思いました。多くの竜一生が自分の希望するプロフェッショナルな道に進む事に役立てば幸いです」

オーストラリア夏期海外研修

英語科教諭 小野瀬勇一

八月に、本校初の海外英語研修を実施しました。二年生十七名が、オーストラリアのブリスベンに二週間のホームステイを



して、ファニー・グロウヴ高校に通いました。

学校では、バディと呼ばれるパートナーと組んで、同じ授業を受けたり、休み時間を過ごしたりします。他にも、本校生だけで英会話を集会的に練習する時間もあります。

学校が終わると、それぞれのホストファミリーの家に帰り、食事をしたり、買い物に出かけたり、子どもやペットと遊んだりもします。

朝から晩まで英語を使う生活は大変ですが、研修が終わるころには堂々と話せるようになりました。また、文化や考え方の違いに気づく機会にもなつたでしょう。

本校のウェブサイトに詳しい報告がありますので、お読みいただければ幸いです。

最後になりましたが、この研修に際しまして同窓会から国際交流基金として多大なるご支援をいただいたことに、この場を借りて御礼申し上げます。夏休みは、授業に影響が出ない一方、渡航費用が膨らんでしまいます。今後も、生徒にとって有益な事業を企画しますので、同窓会の皆様のご理解・ご協力をよろしくお願い致します。

ハワイ島海外研修報告

教諭 西元 重雄(高52回)

昨年に引き続き、今年度は十一月四日から九日にかけて四泊六日でハワイ島海外研修を実施してきました。参加者は男子二名、女子六名、引率教員二名の計十名。研修中は雄大な自然を舞台に、ハワイ大学教授の英語によるフィールドワークを体験するなど、大変貴重な時間を過ごすことができました。



教室から

講堂の歴史を掘り起こす取り組み

地歴科教諭 小野 威人

現在、昭和五十五年まで本校の象徴として威容を誇っていた講堂の残像を追いかけて、二年生の樽井京也、永井淳、中澤祐香、山内浩平、山口智也が、レポートの作成を目標に調査・研究を

進めています。

三月の白幡同窓会役員会において、生徒たちが講堂調査の協力依頼及び聞き取り調査を、また、今年度の同窓会総会の招待学年が、偶然にも講堂解体時に在籍していた学年であったことから、四月の総会でアンケート調査を実施しました。六月に開催された白龍祭では、倉庫に保管されていた講堂部材の一部を展示しました。全日制二二名、定時制四名の計十六名でプロジェクトチームを結成して準備を進め、当日は約二五〇名にこ来場いただきました。

白龍祭以降は、当時を知る方々からの聞き取り調査を行い、七月から八月にかけては、本校の講堂と同じ設計図で建てられたとされる水海道一高、太田一高へ現地調査に赴きました。水海道一高の調査では、当時の部材が二点残されており、太田一高の調査では、太田一高の講堂を実測し、本校に残されている設計図の寸法と一致することを確認しました。なお、水戸二高の講堂は、大正七年に火災で焼失していることが明らかになりました。

一連の活動は新聞各紙に取り上げられるとともに、FM放送でも定期的に放送されました。生徒たちは、注目度の高さに戸

惑いながらも調査を継続し、二本のレポートを完成させています。題名は「煌めく古き講堂―竜ヶ崎一高と水海道一高の講堂を調査して分かったこと―」、「まぼろしの講堂を追って―竣工、解体、そして伝説へ―」。いずれも外部行政機関の懸賞論文に応募しています。今回の取り組みにより、生徒たちは、竜ヶ崎一高の歴史を感じる事ができたと感じます。素晴らしい経験を積みみました。



部活動状況

射撃部

顧問 菅原 冬樹



今年度の全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会は、七月二十八日から三十一日まで広島県安芸太田町の「つがライフル射撃場」で行われました。個人戦では茨城県

勢として三十五年ぶりに浅井優汰(3E)が優勝し、団体戦においては男子チーム(寺田、水柿、浅井)が準優勝という素晴らしい結果を残すことができました。夏休みから二年生がチームの主体となり、秋の大会に向け日々精進を重ねています。

十月一日から岩手県で行われた第七十一回国民体育大会では、新キャプテンとなった高木薫(2E)が少年女子チームピストルの部で準優勝、また浅井優汰(3E)も少年男子チームライフルの部で第三位という優秀な結果を収めることができました。現在は選手それぞれが自分の課題を見つけ、次の目標である関東選抜大会に向けて日々練習しております。毎年のことですが、学校や同窓会ははじめ、PTA、OB、OG、保護者の方々のご声援やご支援のおかげであると、部員共々感謝しております。今後ともご指導の程、よろしくお願ひします。



部活動奨励金贈呈式

教諭 矢口 博(高29回)

県外大会に出場する部活動に對して、大会ごとに二万円から十万円の範囲で「白幡同窓会部活動奨励金」を贈呈し経済的な支援を行っています。例年、全校生徒が集まる壮行会の中で奨励金の授与を実施していますが、白幡同窓会会長が壇上で直接生徒に贈呈することで、白幡同窓会の目的の一つである「母校後援のための活動」に對し、在校生の認識が深まっています。

今年度は五月二十三日に壮行会が実施され、男子軟式テニス部、射撃部、陸上競技部の県外大会出場へ向けて白幡同窓会の染谷信洋会長より奨励金が手渡されました。



第三回旧職員会

倉持 正男 (高27回)

四年前発行した竜一旧職員会(隔年実施)主催の講演会・研究発表会が十一月九日に飛龍館で開催されました。

第一部では、これまで英国を二十八回、湖水地方を十三回訪れたことのある旧職員で、元県教育長の齋藤佳郎先生(高8回)による「アトリス・ポターとイングランド湖水地方」を演題にした講演が行われました。

第二部では、竜一高生の有志による「講堂の歴史を掘り起こす」をテーマに昭和五十五年に解体された講堂についての研究発表が行われました。

その後、総会・懇親会が、一高下のアイガーデン下で開催され、現職の先生も含め六十一名の参加者が一堂に集いました。

総会においては引き続き大野英一先生(高

11回)に会長をお願いすることになりました。

懇親会では石神由範先生(中41回)の旧職員代表挨拶の後、松本君代先生の乾杯の発声で会が始まりました。旧交を深め和気藹々の懇親の時間を大いに楽しみました。



追記 本旧職員会については、ユニークな活動として、同窓会のための情報誌「同窓会のチカラ 2016」に紹介されました。

同窓会HPに掲載しましたので、ご覧ください。

てーじ庵

定時制教諭 櫻井 美奈

六月四日(土)の白龍祭では、定時制の生徒も「てーじ庵」で参加しました。白龍祭名物としてすっかり定着した感のある「てーじ庵」のカレーは、つくばの地鶏を使い、生徒が丁寧に下ごしらえした野菜とともにじっくり煮込んだ本格派です。販売開始とともに行列ができ、たくさんのお客様に味わっていただくことができました。

結果は、十三時には三五〇食が完売!心地よい疲れとともに、充実感や達成感がどの

進路ガイダンス

定時制教諭 櫻井 美奈

七月十五日(金)、定時制では生徒のキャリア教育の一環として進路ガイダンスを実施しました。生徒は、「大学コース」「専門学校コース」「就職コース」にそれぞれ分かれ、大学の担当者の方から大学での学びや入試の情報をお聞きしたり、実践的な面接指導を受けたたりして、普段の授業では学べない貴重な体験をすることができました。

生徒からは「自分の将来の

生徒の表情にもあふれていた。行事が少ない定時制では、生徒のこうした活動の場は貴重なものです。ひとつずつ大切にしながら、さらに充実を図っていきたいと考えております。今後ともPTAおよび同窓会の皆様のご支援を賜りますようお願いします。



ことについて真面目に考えようと思った」「オープンキャンパスや学園祭にぜひ行ってみたい」といった感想も聞かれ、卒業後の進路について真剣に向き合う有意義な機会となりました。



生活体験発表大会

定時制教諭 櫻井 美奈

十月一日(土)、全国の定時制通信制の生活体験発表大会の茨城県予選が結城市民文化センター・アクロスで行われ、本校からは二年生の菊池蓮君が参加しました。タイトルは「あなたへの言の葉」。

今年の夏に経験した祖父母との永遠の別れをきっかけに、祖父母からかけてもらった「言の葉」の意味に気づき、自らも「言の葉」の力で人を癒せるようになりたい、という考えを持つにいたるまでの心の軌跡を、情感を込めて訴えました。手もとの原稿を一

切見ず、一人一人に語りかけるように話す菊池君の言葉は聴衆の胸を打ちました。惜しくも全国大会への出場は残念ながらでしたが、見事「結城市長賞」を受賞することができました。ご支援いただきましたPTA及び同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



編集後記

これまで「叙勲・褒章」のコーナーで受章された方々をご紹介してきましたが、毎回情報収集の限界を感じてまいりました。役員会等で検討した結果、今号から「叙勲・褒章」のコーナーを割愛することになりました。ご理解の程よろしく願います。

前号の「多士済々⑤」で紹介された歌人大野誠夫のペンネームに関する記事につい

て、鹿野勝政氏(高13回)から執筆者の鈴木久氏(高2回)に連絡がありました。大野誠夫に関する新事実について鹿野氏に原稿を依頼しました。会員の皆様からの直接の反応が会報編集に携わる者にとつてはとてもありがたいものです。

今後も、読みやすく、興味の持てる会報を目指して充実した紙面作りに努めてまいります。

倉持 正男 (高27回)